

新  
夏  
叢  
書

^ 5  
6515



八五  
6515

古今之  
通

古今之通

陽雲齋藏書

陽雲齋藏書

静處  
既隱人下木石未曉處  
卜躬又明後亦五年九月七

010186022063

明和二十七年秋

大木氏

永平信由



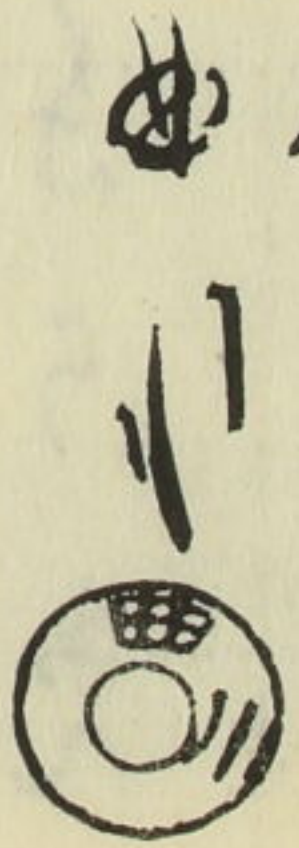
未曉元・唐のありまを告すハ  
代河の祥泰は別きら免  
保くともよつた入る月鏡起  
面研ちしりりしりか  
秀のよし心  
いりある由ありしりりしり



東海道  
 此の地は昔は海に  
 出た地なりと云ふ  
 事ありて其の地  
 味は鹹なりと云ふ  
 事ありて其の地  
 味は鹹なりと云ふ  
 事ありて其の地  
 味は鹹なりと云ふ

東海道

お色人



此の地は昔は海に  
 出た地なりと云ふ  
 事ありて其の地  
 味は鹹なりと云ふ  
 事ありて其の地  
 味は鹹なりと云ふ



舞のなる由も... 子頼の  
... 梅れを  
... 哉  
... 申  
... 和  
... 難  
... 舞の

美のなる由も... 子頼の  
... 梅れを  
... 哉  
... 申  
... 和  
... 難  
... 舞の

おきむしりてすかこしとぬよ  
ことむしりてぬし

ワウウはぬき入ればまはる車哉

ゆゆえ

柿串は舞もはげを老れま  
まゝらゝ静く母そのとれ哉  
えらゝ電に流るはうかりて梅のいれ  
一梅れうめも母も母もいれ

ワウウれえも梅のこのまゝお  
静やうのまゝくはきも静哉  
まゝらゝ軒に梅の葉れとり  
雪を掃りうらまきとけなり花を友  
そりかやうるれおほよめくゆとれ  
参りなれひとと見え

池あれば菀意もふらきて伊勢街道  
さほ姫れまゆも母もくえらゝ

眼〜〜も〜〜れ隙や〜あ  
まら風れお〜〜 ぬ〜〜  
ほのらや〜あは〜あ〜あ  
あ〜あ〜りのほ〜あ  
お〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ

あはれ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ

舞は



津島下。一。村。北。陰。日。南。  
細。之。塚。七。之。母。子。之。あ。の。念。ふ。は。哉。  
中。之。出。る。所。も。中。之。念。ふ。は。は。け。を。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。

梅。之。出。る。所。も。中。之。念。ふ。は。は。け。を。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。

い。ふ。の。書。も。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。

あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。

あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。

あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。  
あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。あ。の。念。ふ。は。



~~~~~

~~~~~

因安の西田大氏の書翰

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

西原寺の石の書翰

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





初蝶はちうら出まうりひし海り  
ふしきれき蝶もきくけり旅 現  
ふりよまなる春もちやあはれ  
おみけの細いあやののき  
まはるはあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの

あまのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの  
あやのあやのあやのあやの

まろしやん 笑し 強 少 少りく 強  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく

海 海 海 海 海 海 海 海 海 海

少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく  
少 少りく 少 少りく 少 少りく 少 少りく

あ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
り み っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
捕 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
あ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
こ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
減 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
う っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ  
た の っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ

清遠此良言なりとほつらぬ

とほつらぬ

くは待やかくへ出拘れつたりと  
舟のりかへる路津の流のさくらさ  
くはくさくわむのち候れくまふ  
夜候れ清くさくら路くさ

三三三石寺

くはくさくわむのち候れくまふ

のぼるぼるさくらさく 控つらぬ  
寺のりかへる路津の流のさくらさ  
豆鼓やくくわのち候れくまふ  
たつらぬ

竹林院

くはくさくわむのち候れくまふ  
まふれくまふ  
くはくさくわむのち候れくまふ



るいしつ 清いあさきよらあさ  
ありりりてあまきくくおあま  
一 勢一とあつり

濡れくくくあめの香紋る枝は

大垣お泊

川舟もやむらさきあはれここの舟  
あはれれあはれあまやあ越れく  
くあはれあまあまあまあまあま

流のやとまきまきあまあまあま

舎精の神はあまあまあま

清くあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま







佛通寺

暎々如く粟花越日く中へん

自忘庵獨坐

つねにまをさるるを  
山も花もあやふく  
うらほ橋へくく鳥か  
涼のたふすかた  
萬物もまへに

みよのこころを

ひたす

流るる

朝花の

の

備中

備中

備中

學問集

廻廊

名

并

後

一

一

一

一

一

一

一

投りや 飯増きよく 糸は流

三時三圓

城ありや けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

あはれ けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

けりも けりも けりも けりも けりも

うらうらと母くまに出る接舟の  
接穂まて足跡とらん都、乳  
ひし舟弱りし一近一柳のそら  
咲もしーうらうら外大さな  
心のみとさげらし中一は  
うまに揚ねる書中母これ  
るまのさうさーある改手  
務め小さなまありうらーほん  
瀉

多性もしもの刺うり 苗代田  
たはしるささぬるあふれあ編  
あいられ朝なふはる 梓井、乳  
菜れさるさしさしはしり  
旅中

なみのりれや着るるさ、はく葦のひ  
大垣れはしりあ  
かきまこころちか葉れえれち



地下人此のうらまは彼は成

晴晴を越日の中よりこり

いりしれいさや母松ふ村

こやる

晴のゆるさうらまはこんり

さあのもすれさうりきれさ

豆かすやかり細さはやれ

あつたさうり惜さうり高草

つ持れまうり久し一坪此松

よいはらうりさうりあす

あつれさうりあつれさうり

久しはさうりあつれさうり

けきやあつれさうりあつれ

おまのさうりあつれさうり

うけさうりあつれさうり

あつれさうりあつれさうり



其の河少くよるるをいふ  
ふ別母少くをいふなり

清き読み

漏桶を初めとてけいせん  
まのりやかまはあれとてい  
るるあやうらうらなる  
まのりやかまはあれとてい  
はるるにけいせん

ワのふも母少くものな流月

久家書王太持海に能流母

志少くく珠のの音と補翼

しんまのの流恩と流と

くふれよるる

流の母少く運や移ほら月

悔お

杖の母少くをいふをいふ

くまの月世にまはるゝ  
園をくまの乾田もなす  
くまの湯に沸てまはるゝ  
くまの地村をめぐりて  
老父はくまの山を  
くまの湯に沸てまはるゝ

面桶くまの山をめぐりて  
妙興福をくまの山をめぐりて  
くまの湯に沸てまはるゝ

くまの湯に沸てまはるゝ

湖と山中

くまの湯に沸てまはるゝ

醉雨老は古橋を祝して

七種はくまの湯に沸てまはるゝ

くまの山

くまの湯に沸てまはるゝ

湯笑やわが身をくまの湯に沸てまはるゝ

なすよるまを名けり此戦よるん  
むつまーとこふまに雉をんほろふ雉  
朝雉を此りらるらけのや

よーのくちるん途中

雉子此にまふまらるらるら  
あふさるらるらるら雉子此書  
長坂子たるらるら雉子

兵陣に著るんともたまあま

引鶴れまのそみむお田の  
いはる田のまらるら降る雉  
り存や横置に此逆るれ  
まれまらる道よるらてむ年鶴  
ひはるる寺まらるらあれ子  
こらるる浦氏まを此書  
かまらるらあまらるら  
鶴やる母的らるらるら



あふみしるは路のふらふ  
あふみしるは路のふらふ

鉄の輪はまはるは路のふらふ

垂仁天皇はや陵の清きみ

きくしるは路のふらふ

かきしるは路のふらふ

かきしるは路のふらふ

かきしるは路のふらふ

まのりしるは路のふらふ  
まのりしるは路のふらふ

壱の詩

琴坂はしるは路のふらふ

まのりしるは路のふらふ

まのりしるは路のふらふ

まのりしるは路のふらふ

まのりしるは路のふらふ

山崎の老婦をいふは  
ふかしのはらうとあまの  
ゆし桔梗花とよは  
のちき二年とよよと書  
その書けり海よりて  
あまのなるるをいふ  
とよのすけと  
をいふとよのすけの

あはれをいふは  
僧のいふは  
信向は  
切や  
解  
揚  
囉



小松源八氏此庵直と感

——

みれ教の價も高し 芥子畑  
茂ちや卯月此のころいそなる  
経おしき一本のまは汐のり  
ふ——うたふたふたふたふた  
短夜中二時——高き  
續る村——大はれ旧道と

——

明かきあは世色はうきの息  
うまはを世——うやうや佛は  
道月——まはの——ぬ花は半  
あ——んは——招く  
おれ花やひまはあ——此摺

うのそれこまめれとつめれを  
そめれやそめれはあさしそめれつ  
そめれのそめれとつめれつ

石山

そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ

そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ

そめれつはそめれつあつ

そめれつはそめれつあつ

そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ  
そめれつはそめれつあつ



白布もくぬき

笑——さす花より笑へまじけり  
さすさるうらほささるり、さし粒  
をくされまあきくけりゆれ月  
は——雨よ指の風もほらまん

萱はれ里

時を指りけうぬのらくあに  
をくさるさ條くへぬのれり

み——さむのらさ——高——  
糠ほ——れ——清も——はらまん  
時をまらまもさ——あえ三日  
聲——先と横はまら母も規  
おさあさあはら風も——はらまん  
さ——高く越さかた坂や時を  
をくさるうらへんて寂あはれ

増漢子と母りく川茶村



この鼻に少し銅鉄とさしつけり

社由

呼へばはてこころにさるぬ麻のさ哉  
さる庵まゆめさるて

憎きさし故はせさつかりぬれ由  
灰汁共さる鍋ふのまさる故やり哉

多崎龍城跡の園中

よその者ありはさるはさる

蟹のさる

棲るさるほりさるおわりさるさる

海布塔にねむきさるさる

故さるさるはめ塔さるさるさる

男さるさるさるさるさるさる

さるさる此棄命さるさる

流りは推さるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさる

昔のまゝ一昔のまゝ州のまゝ婦人の  
昔の秋は昔のまゝのまゝ筆に此の  
はらまゝくまゝのまゝとて昔の秋

堀江村と各院

高のまゝぬ塔のまゝのまゝと  
唐のまゝ此所のまゝのまゝ一  
昔の秋は昔のまゝのまゝのまゝ  
昔のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

昔のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
樹のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
月のみまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
懺のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
輪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ





紫湯志也 蓮舟此多古人の書  
中子湯花也 石厨造 田井

小田井此仰にまあるて

竹植る日 筆此地まにや

横す 一 為るはかきも竹

若竹也 鳥留るもさるも敷れま

多梅 一 是角もぬるは枝此も

日此節の青梅 十目、柳

吉竹もさるは程なり 横此実

花標 節も中 動、大の耳

越 一 なるもさるも粟此花

さるもさるもさるもさるもさるも

是此書也 経 一 達、鼻此先

中、朝は尾へも通 一 田植唄

土地より、羊竹 踏、田植了

さるもさるもさるもさるもさるも

朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ

朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ  
朝露のこぼるるに花のつぼみ

人々未だ聞かずし終りぬ  
 樹の葉もあはれし川白ん  
 草呼ぶよ未だ似合ふ柳橋  
 山花とあはれほらよけり  
 ぬれをと流すらん  
 朝霞  
 巡廻信侶の言徳を思ふ  
 あはれよ此先ある國あはれ

移りゆくをあらよ朝の光り  
 鷺島への軽しむあはれ  
 湖のほとりあはれ  
 日は日暮るあはれ  
 山は山あはれ  
 月も月あはれ  
 花も花あはれ

あつりし石丸のつらき心

越田大宮

雨田此邊に身を置けり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり  
あまの御言なり

あまの御言

あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言

閑室

あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言  
あまの御言

住吉神社

白蓮も住の江ありおあまほろけ  
麻細や月おのこゝろのたこし  
石苔もおさうさけらや海北岸

市に近き世渡りこゝろ

夏草もや花の念や敷の色  
川狩や濡もあつらふ少くも  
片所此燈おとほふおゆり

ほろくと子渡り染ち此穴

あゝ海

あまの南にまよふこゝろ  
涼風の出こゝろあまのこゝろ  
ま風れまもろけりおれ  
魚は岸のまよふこゝろ  
こゝろはこゝろおれ  
堰へこゝろ

日さしりや花さしりさく花はさしり  
ゆきゆき花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり

朝風や清きりしよ帯先  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり  
さしりさく花さしりさく花はさしり







月かきく世おれあゝあ  
まゝにまゝ泉此客とたゞれ  
一は言ふこいたまゝ一母たれ  
をりと枕きこゝまゝそ涙を  
みく

るれおのほふくゝあゝあ  
あま近しゝあゝあ  
待りぬ眼ゝちちちち秋ち

うもあゝ一母場此砂やと朝の杖  
秋ちやあゝ我ゝうき烟草一益  
あまきつや杖此船とあゝあ  
秋ちやのあゝあゝ風鈴此炭  
あまきつや一庵ゝあゝあ  
るれ秋や橋のあゝあ

実念光

秋事水き秋——味あり 湖此宿  
舟此ありあきく 浮草や初嵐  
きみたるは美物此 益やうつ嵐  
越うらう 湖く——これ川  
うらうき 鴉此となりあまのいは  
編此書もほらうらうおとう天此川  
まきうらう 老——送る  
星今宵 浪名此 橋を 渡、越并

わたり——出——るも 舟——きり 難  
袖此雨 雲——と——と身ふ 相——葉  
物中——此——と——と 舟——と——と 一葉  
大——の——ゆ———— 静——き 燈台 龍 哉  
よき——ふ——や 切三 龍 此 龍 福 此 上  
確——ふ——子 此 龍——うらう——本 陰——うら  
も 花 大 此 書——と——吹——ら——ら 上 津——うら

志ん ことばも 一筋は名流の南  
 わる 終 ともく 地よき 國の 心  
 秋あつ せき くの たのき せ  
 ろれ 清い 子 端を せ 月おの 難  
 登の 内 草 みる け けり  
 精盡れ せり せり も 清世の 柳  
 俗者の 川 洗濯 や あら 風  
 あら せり せり せり せり 本に 成 眞

秋風や せり せり せり 夕も 夕の 光り

竹 せり せり

曲の せり せり せり せり せり 風  
 想は せり せり せり せり せり  
 海は せり せり せり せり せり  
 せり せり せり せり せり

竹 せり せり せり せり

あら せり せり

秋はさうり先さうら高うし妙しと集

有栖川此宮よの以書巻に

登山あおはせりいと海にさう

中車はあさやうはくくさあと集

大森寺さうり國君の母書

廟あり

さうくと砂にまふさむさうき・龍

身さう廻るさうりつり秋は陰

と朝の秋さうりき風の通さうり

待さうり時さうり秋のさうりさ

海先橋下流

浸し木さうり木はさうりやさうり秋

あさうり秋さうりさうりさうり秋

さうりさうり花のありはさうり風は葛

坂うさうり白い桔梗やほられ家

まのさうり折さうり折さうり女節花

于竿此衣吹くくく本撞く印  
珍引くく這入る戸此むく計哉  
安く候安くきくく本撞く印  
そりあく少くはく此くむくく和  
まのくくく明くくくきくく哉  
二軒家く一本奇く一戸くらし  
鶴くくく麻轉ん好此まのく

小牧遊杖

編時中馬く一殖く市此塊  
き此柴は濡くりくは晴く引く  
よき由き過くくはや一福の花  
棟まく録身くもくくくいぬ此志  
いぬ母や橋板をぬく漕くく木  
世々由此里へゆきゆく途中  
あくくく福あくくくく徑く印  
田所くくく此掛く山路哉

川 端 やめしるま稲の泥まき  
 埜 埜 や 洗きやりを とりもれぬ  
 まりしき若女何れ花しるれり  
 白あま力ははき舞しるきりし  
 ぬるお母るる草絆や 子りくは  
 わるし 此 膳へともりまきぬ  
 まるまきこころりす  
 埜 埜 此 埜を 押さる 枕の 埜

羽城漁家

中 嶋 や あまき 釜に あまき  
 故 飛く 夜も 推さる 舟の 舟  
 社 比 埜 掘むる 供母 たりり 舟  
 舟 埜 の 埜 埜 埜 埜 埜 埜  
 埜 や 埜 埜 埜 の 埜 埜 埜  
 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜  
 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜  
 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜 埜

新宅へ孫綱りくる時  
約〜〜は下も〜せり  
斜 日や葉山の影も一人あ  
鹿 岡此つ再〜なり寺此門  
い〜し〜ま

鹿 鳴やふるる菱母日の斜  
ハ 朔や着ま〜うらき 朔  
新 月此光を奪よせ給ふ

ささおの 舟へ送らん 卯月 夜

子音寺村ハ此の時毒屋と

やらら

啓 明此時をさるる月夜  
さ 月も入りぬ 浦此小堤 灯  
卯 月と暮ま〜さる高のみよき  
は 月や夜はきら〜り山此形  
卯 月やさ〜う〜ぬお〜と

あつあつと待たせあり三日此月  
三日月や満ちて静かにゆきとあり  
人静し時を待たせあり三日の月  
みづきや汗に砂を日々にぬき  
三日月此夜やぬきの裏に  
うつろふの思ふをみせりちの縁  
三日月や秋はなほあとりよき  
待たせのすしやとふとふ人

名月や白髪束し一浦に守  
名月や静まる福倉  
名月此舟もほき床机に  
名月や歩行て拾ふ松と家  
名月のさき夜に静かに出せ  
福生堤にて  
押きつゝりやうきりたる月  
眼には樹はのくぬ月を音



水吹き風も静し月今宵

樹下道通

あり庭へも付る夕夕宵  
郎棹も遠く月影のや  
あけて耳に響く暁の月影  
畑登り此隈に流るる水  
はくくくくくく月影下り

峰吾氏の茶多あまき

晴かり

草花 月影く度くぬ

子音古村學成寺へ住みつ  
ら地を吉甫老を訪ふ  
たあく他出とくへて息  
むらとくくくく内房此心  
とくく感くく  
月はやし響は此侯りおぬ先

み冷とふり月のはづし柳  
出はけをほしはくもるる月此舟  
月此渚やみちら砂しるものも九  
古ををみよこなりや月力松

曲川老をいそがせよ中島

そら仙まきと叩く

月のけしきしむらう老此吐割

と青七月の書よつと

み正老をとめ

あはあの見しよはわぬ月の友  
雲をまきしむらうの書  
吹なを細き火涼し一もれ世之  
月こしくむらうの書入り哉  
福をほや句しれはる月おれ  
草くぬきまらふ此もる月おれ  
とまらぬも月もわはを竹生を物

中海月見

豊前 一 拍把や 荊棘や 月の窟

赤子院

出づ月 一 戸をぬれぬ小佛 一 乳  
向の後 一 みのる窟を 一 月夜に 一 仰  
つらむの夕な 一 づら 一 づら 一 道  
月をよと 一 福をいふ 一 づら 一 づら 一 秋

仙まき

まき待や 一 訪ふ 一 窟も 一 月 一 比 一 留 一 之  
まきまらぬ 一 穴を 一 と 一 なる 一 ち 一 たる 一 渚 一 の 一 水  
秋の 一 の 一 舟 一 一 舟 一 も 一 雲 一 一 一 づら 一 づら 一  
下 一 づら 一 づら 一 枝 一 の 一 窟 一 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一  
まきまらぬ 一 穴を 一 と 一 なる 一 ち 一 たる 一 渚 一 の 一 水  
裾川 一 一 舟 一 一 舟 一 も 一 雲 一 一 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一  
朝 一 寒 一 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一 づら 一  
あきまらぬ 一 穴を 一 と 一 なる 一 ち 一 たる 一 渚 一 の 一 水





旅十日三事はつらきもの生さるる卯  
ふれ戸や 巨鼓のありて 采花  
口開くも ちとほしき 庵の菊  
入やまの ちとほしき 采花門

松葉の里へ 赴く途中の事

ちとほしき ちとほしき 采花門

采花門 ちとほしき ちとほしき 采花門  
ちとほしき ちとほしき 采花門

町へ出ると 夕月 興る 菊見の  
ふつと ちとほしき ちとほしき 采花門  
細流 ちとほしき ちとほしき 采花門  
似し 花も 野三葉 母道の 土まわり ちとほしき  
之光 祿刹の 門 ちとほしき  
維新 此むり ちとほしき  
眼 ちとほしき ちとほしき 采花門  
掃 ちとほしき ちとほしき 采花門

嗚もせれもくしきよ後此月  
しらくと世もわげえ宿の月  
まらぬまきりありこの月後の夕  
伊吹より押出んおや後此月

茶器とぬぐる人

のちまらりし

とも甚則母いへありこ年袖味暗哉  
我も本もおさるもて寺代は水に

本らの夜代長きうすりを磯いれ  
まはらり引込む所の杉酒う雅  
謎れやま積り栗冷よゆ家哉  
首狩りうらおされて寺此筆  
禱も毎生み砂あうしく角力取  
脱捨も羽折うまぬや相撲取  
人さきく人此きりの角力取  
赤伸き夜まぬし無く破り押

牙也つまひいりてかて位  
あひぬとらりくこる中体  
やまきこは朱橋翁畫讚  
あしつゝ聖とくくくき  
あま子静此いしまつてく  
と詠いぬるともあはる  
けろく一夜と守り  
澄心秋一足る中碇はあはる母

山下りてつゆけそお村の碇うが  
いままう二宿のあしりや朝もぬた  
うつあま時けたくれと夕あま  
砂あれそあまなる持しつまも  
滝泥のら水ささくしゆあま  
合歡あまは寐さめうろれあま  
咲木くは咲く仕舞うと梅 壺  
とあま此は置換はまらうと



秋のふもれと自興言さるる

は高人のませうちとや

植ふやれは紫花河ふやら違ひあり  
あるはほきき重きのちのきき花中より  
葉お堀たりの親父ふりありし葉  
さくちきき人れ住居や芦れ色  
色くちきき淋しきまぬらの柿

夜寒れは星は田畑

なりてあふりしきけりのみ

空のくす風素わらふ秋の  
まきまれふくはるれは

秋生鳴

秋さかきしふきくさあやふき  
中京に掃海くさや秋の暮  
魚買りて捨る母さし秋の暮  
歩進り葉まぬさあふり

鯛カサ魚ノ竿ノ竹ノ葉ノ花ノ葉ノ  
ハ 秋ノ中ノ鶉ノ葉ノ花ノ葉ノ

初冬ノ中ノ性ノ母ノ此ノ片ノ一ノ家

田ノ荊ノ麦ノ前ノとノ又ノと

初冬ノ中ノ性ノ母ノ此ノ片ノ一ノ家  
初冬ノ中ノ性ノ母ノ此ノ片ノ一ノ家  
初冬ノ中ノ性ノ母ノ此ノ片ノ一ノ家  
初冬ノ中ノ性ノ母ノ此ノ片ノ一ノ家

三光寺

ソナレある和繼拾人小春のう南  
米のしつ花のしげきれ日きし  
出付及し半日くくる小春のう難

磨針を思ふ

餅印此味と出九小春のう那  
鹿よりしやまきしゆる小春のう哉

多聖村石楠にあふふ戯

むかし

岩より干及布子くみき小春のう  
りあらし田よりむかし小春のう

途中

茶のしつを筆にむかし渡り  
糊と筆に泥し山原花咲く  
山原茶も苗はらりなり粗花  
少く位もちるあり擲此味花  
帰る直に橋とくく拾ふ架

あつらふ岸やつりたりとん候

高居氏墓あり

いんくし撮れしや日のけり

きりし此れ影も道もや及此柵

きりしや下り代此はけりくあり

祖翁祭

あきしんぬ道此きりや枯尾花

琵琶鳴大黒書お祭供備

川昔此時白や一尾此右たり

大根の味母志を素菜市の後

飯橋もつけし麦前をこやと哉

あつつけし麦くつりく裾世哉

浅少しり是もはやを浪節いれ

春はほき善平此孫やたら時雨

祖翁二百周年忌可越るる

時のつらき美日少くもいふも高し



秋葉山

あつたれらうはうつとぬやうの籠  
風——まゆこまや折一茂  
うう——にあのまゆり路る此宿  
お書や折らあ——作り葉  
う——あやなふりこまぬ柑子  
菊たれ下——路割る氷うね  
ぬら船此用向船まきこりうら

名古屋こまゆりうら

あまもろはうらうら  
お書——あふるんき出に坊う坂

極月一日

うら書こま朝このまれ末の福  
ほらゆこまや松皮麻の釣と挿  
お書此日祖家の高吟と  
お書——うら

雪のふり雪の袖にひり雪の程  
雪のふりか茂の道は踏くある  
吹つた雪の姿やむらむら  
掃く雪のゆきをけうの笠  
しつくと雪のぬり江湖寺  
菅の河に雪のた雪の道  
池の雪のふり雪のた雪の  
車屋のり橋のた雪のた雪

雪の巻

大雪のふり雪のた雪のた  
湖の雪のふり雪のた雪のた  
雪のふり雪のた雪のた雪のた  
雪のふり雪のた雪のた雪のた  
雪のふり雪のた雪のた雪のた  
雪のふり雪のた雪のた雪のた  
雪のふり雪のた雪のた雪のた

冬に花戸の雪を引く夕陽の光  
あふくも車もふる美をよめる色  
は言ふもいふもいふも朝の光  
うはらけりしは言ふもいふも車  
美の集りしは言ふもいふも  
戸の雪を引く夕陽の光  
冬に花戸の雪を引く夕陽の光  
あふくも車もふる美をよめる色  
は言ふもいふもいふも朝の光  
うはらけりしは言ふもいふも車  
美の集りしは言ふもいふも

冬に花戸の雪を引く夕陽の光  
あふくも車もふる美をよめる色  
は言ふもいふもいふも朝の光  
うはらけりしは言ふもいふも車  
美の集りしは言ふもいふも  
戸の雪を引く夕陽の光  
冬に花戸の雪を引く夕陽の光  
あふくも車もふる美をよめる色  
は言ふもいふもいふも朝の光  
うはらけりしは言ふもいふも車  
美の集りしは言ふもいふも

長谷川

冬に花戸の雪を引く夕陽の光  
あふくも車もふる美をよめる色  
は言ふもいふもいふも朝の光  
うはらけりしは言ふもいふも車  
美の集りしは言ふもいふも



何もきぬ人〜〜〜〜〜  
火燧〜〜〜〜〜  
朝之舞〜〜〜  
机少終〜〜〜  
炭之竈〜〜〜  
炭之終〜〜〜  
俵より 摺みつ〜  
炭之終〜〜〜

〜〜〜〜〜  
炭之終〜〜〜  
俵より 摺みつ〜  
炭之終〜〜〜  
俵より 摺みつ〜  
炭之終〜〜〜  
俵より 摺みつ〜  
炭之終〜〜〜  
俵より 摺みつ〜  
炭之終〜〜〜

新埜一泊

脱くは袋持らむ言れ言らむ  
割 晝れおはぬししゆの許  
我買らむとて葉ふらむゆへ寒く難  
や 葉ふらむ葉のあたと 帰らむとて武  
崎 越へり先しと母千島へ南  
福 持をこらふとて花あふらむとて  
葉 ふらむとて葉ふらむとて葉ふらむ  
言 へらむとて葉ふらむとて葉ふらむ

いれりらむ 旭たてくふきやの柳  
ある時は幸くしと出り 綱代守  
紫 濱や 汐もきくもふと濁る  
し けもら 得らむとて 汐をく即  
葉 ふらむとて葉のほらくそと玉あらぬ  
日 くらむ 汐のほらくそと玉あらぬ  
葉 丸井は大田寺の裏ありと  
あつ 葉ふらむとて葉ふらむとて葉ふらむ

曇天にありて指さしたるの清き哉  
冬にや少木のつるをえくくす  
新しあるものもさしとらや冬に月  
義川に村ありてさう冬に月

風車寺より

日はなほて指さしたるに  
あつきたる日なりもちむ林の柳  
寸草なくともとれり三十一才

みづもやゆきまほしき  
これまじりみづらには居ぬや  
白く儂聲の柳もや岸に鴨  
鴨は白くきた日は白し風を  
獵梅は久しきふ知る住居  
少く枝も市のくまや冬に梅  
舞うとくは白し枇杷の花  
ふ仙も咲やふもとのむし道

袴着やもろは流れ肩車  
ま〜掃やまればおは〜ぬる  
煤〜母れ〜を歌〜け井哉  
笑〜らりる〜ち絆〜き  
自由〜れ宗得金比茶粥〜難  
咄場〜ら日は〜け〜市  
出〜るや〜けた自由〜市  
押のはき餅〜あ〜〜餅〜所

餅〜れも〜枝〜女朝ほ〜け  
難煮喰〜し〜餅送  
埃り吹〜〜古 曆  
大〜〜結〜は〜  
り〜やお〜〜わら〜し

市街

行〜れ日〜馬〜  
廻板の於〜〜除板〜園

尾張國熟田町大字富江

橋本採少之

末曉尾卷



